

市場経済下ベトナム農村における就業構造

岡江恭史

途上国の農村における出稼ぎ・非農業職への就業に関する先行研究では、土地や資産の少ない世帯の労働者ほど就業率が高いとされてきた。しかしベトナム北部デルタにおいては、1980 年代からの脱集団化の過程で農地の均等な分配が行われた。その後も平等主義的な農村慣行の中で農地の流動化が進まないままに今日に至っている。それゆえ出稼ぎの要因として資産規模にのみ注目するのでは不十分である。

本報告では、近年海外出稼ぎを多く出しているベトナム北部デルタの村における報告者自身の調査結果から、海外出稼ぎ者の世帯家計とともに、そのパーソナル・ネットワーク（親戚・知人関係）に注目して分析を行った。さらに国内出稼ぎや在村日帰り通勤を行う者との比較検討を行い、市場経済下のベトナム農民の職業選択はいかにして行われるのか、また、それが村落の経済構造に対してどのような影響を与えているのかについて考察した。

調査結果を検討した結果、以下の結論に達した。まず村に居住しながら大きな所得を得ている世帯は商業的農業（畜産など）や自営業（集荷業など）に従事している世帯である。これらの業種は、学歴も初期資本も多くは求められないため参入は容易だが、外部の市場動向に常に目を見張り、それに見合った商品を供給するために不断の経営努力を要する。

このような市場競争に勝ち残れない層のうち、親族が海外（特にこの村は台湾で家事労働に従事する女性が多い）に出稼ぎに行っている世帯は海外に、南部に親族がい

る世帯は南部に出稼ぎに出る傾向がある。このことはベトナムの伝統的な血縁的結合が市場経済下においても重要な意味を有することを示している。しかし、海外からの送金は家屋の増改築など生活用の用途に使用され、その資金が村内の産業に投資される例はほとんどない。また南部への出稼ぎは転出した子弟の独立を前提とした一時的なもので、当地で家庭を持てば実家から完全に独立し送金額も減少する傾向にある。すなわち外国や南部などの遠方への出稼ぎ労働が村の経済構造へ及ぼす影響は小さいといえるであろう。

以上のいずれにも参入できない世帯では、若い男性は炭鉱等での肉体労働に、若い女性は軽工業の工場に就業する。これらは個人的なコネも学歴も必要ないので、参入は容易だが肉体を酷使するため長期の就業は難しい。また最近では、職業専門学校の推薦で海外に出稼ぎに出かけたり、工場に技術職で就業する若者も出てきている。

市場経済化が進むベトナム社会においては、親族関係など個人的なコネが今なお重要である一方、個人の経営能力や学歴が重視されるという他の市場経済国と同様な傾向も見られつつあるといえるだろう。